

## 在野の医師として IAGG マスタークラスに参加して

眞喜志直子

(日老医誌 2025 ; 62 : 441)

今年度から老年内科医として勤務することになり、IAGG マスタークラスに参加しました(これまでは脳神経内科医として勤務していました)。老年医学の分野は自分にとって新しい挑戦であり、大学などの研究機関に所属していないこともあって、研究経験も自己流で、これまで学会や国際的な場に出ることに対して少なからず引け目を感じていました。しかし、今回のマスタークラスに実際に参加してみて、そのような不安や劣等感は徐々に和らぎ、これからは自分なりのやり方でも学び続け、臨床と研究の両方に取り組んでいきたいという前向きな気持ちが芽生えました。

英語にはあまり自信がなく、プレゼンテーションやディスカッションの場では緊張することも多かったのですが、「老年医学」という共通言語があると考え、開き直って参加することにしました。その結果、思っていた以上に多くの学びと交流が得られ、とても充実した時間を過ごすことができました。特に印象深かったのは、フィリピンで嚥下機能や終末期医療に関する研究をされている先生と友人になれたことです。お互いの国の社会背景や医療体制、文化的な考え方の違いについて語り合いながら、国際的な学術交流の意義を深く実感することができました。こうしたつながりが、将来の共同研究や相互理解にもつながるのではないかと、期待がふくらみます。

一方で、発表当日には思わぬトラブルもありました。準備していた原稿ではなく、間違っただけの原稿を持参してしまったため、急きょ原稿なしで発表する羽目になり、



内容も構成も不十分で、自分としては大失敗でした。落ち込む気持ちもありましたが、チューターやセミチューターの先生方は、その拙い発表にも真剣に耳を傾け、たくさんの質問を投げかけてくださり、丁寧にフィードバックをいただけたことはとても励みになりました。

この貴重な経験を通して、私はさらに学びを深めたいという意欲を強く持つようになりました。今後も日々の診療に真摯に向き合いながら、自分なりのペースで研究にも継続的に取り組んでいきたいと思えます。最後に、このような素晴らしい機会を提供して下さった日本老年医学会および IAGG の関係者の皆様、そして刺激を与えて下さった参加者の皆様に心より感謝申し上げます。